小松満のコラム ひとり言 第14回

ギャンブル（賭博）依存症

理事長　小松 満

3月末にアメリカ大リーグのドジャースに所属する大谷翔平選手の通訳水原某が突然解雇された。解雇の理由が違法のスポーツ賭博であることと、その損失が多額であることに多くの人が驚愕した。国際弁護士などという者やアメリカのマスメディアそしていわゆる評論家などが根拠のない推測で大谷選手の責任を追及していたが、最終的に米連邦検察が大谷選手は被害者であると認定した。

アメリカでは2018年にスポーツ賭博が合法化され全50州のうち38州で行われている。ドジャースのホームのあるカリフォルニア州では禁止されていた。しかし、オンラインカジノが隆盛を極め、禁止されている州からも容易にアクセスができるという。日本国内からもアクセスできるが、賭けをおこなうと刑法の賭博罪になる。

水原某はギャンブル依存症であると告白している。依存症とは、「ある特定の物質や行為に対してやめたくてもやめられない状態」と定義される。アルコール、タバコ、薬物、パチンコなどがありギャンブル依存症もその一種である。ギャンブルで味わうスリルや興奮が脳内に幸せホルモンといわれるドーパミンという物質を発生させることが原因という。ギャンブル依存症は脳の病気であり、精神病である。

筆者は子供の頃からビー玉やぱー（日立ではめんこのことをぱーと言っていた）、ベーゴマと勝負事が好きだった。その後は自然とパチンコ、麻雀、競馬、競輪、海外でのカジノなどをほどほどに楽しんできた。ギャンブル依存症が社会問題になった時など依存症の診断基準に照らしてみるが、どうやら依存症にはならないようだ。

依存症の人は、ギャンブルのために嘘をついたり、仕事を休んだり、借金を重ねて重要な人間関係を損なうようになる。すでに述べたように依存症は精神病であり、本人の意志で治せるものではないし、家族が借金の肩代わりをしてもギャンブルをやめることはない。

神奈川県横須賀市の国立病院機構久里浜医療センター（046-848-1550）はギャンブル依存症の研究と治療を積極的に行っている。令和2年に「ギャンブル等依存問題の実態調査」を行い、全体の2.2%にギャンブルによる問題が疑われたとのことである。

茨城県精神保健福祉センター（029-243-2870）では相談窓口を設けており、茨城県立こころの医療センター（0296-77-1151）が治療している。

ギャンブルをするときに予算や時間の制限を決めない人、勝ったときにまた次のギャンブルの資金にしようとする人、ギャンブルをしたことを隠そうとする人、負けると次に取り返そうとする人は別表の自己診断リストで確認して該当する場合は直ちに受診すべきである。

依存症の患者を増やさないためには、ギャンブルをする機会を少なくするのが一番である。

2030年には大阪市の夢州にカジノを中心とする統合型リゾート施設が開設される。依存症の増加が心配される。

国は依存症対策として、入場回数の制限や入場料を徴収するなど世界最高水準の規制を導入すると言っていた。しかし、日本経済新聞は論説で「ただ万全の依存症対策をとれば、カジノの運営は厳しくなるだろう」と主張した。何をか言わんやである。

厚生労働省は都道府県に依存症専門の治療拠点を最低1か所以上確保することを求めているが、病院の基準は各自治体の判断に任せるとのことだ。

世界最高水準などといってもすぐに骨抜きになるので信用できない。

シンガポールの規制は極めて厳しい。入場料は外国人は無料だが、シンガポール人と永住者は1回約1万4千円か年間約28万円とのことである（2022年5月朝日新聞）。

入退場も厳しく入場の時ばかりか退場の時にもじっくりとパスポートを確認される。

ギャンブルがいつから始まったかは定かではないが、狩猟や採取によって生活していた時代からだろうと言われている。

フランスの詩人ボードレールは「人生には真の魅力はひとつしかない。それが賭博である」といっている。またドストエフスキーは「賭博者」の中でルーレットにとりつかれ破滅に向かう青年を描がいており、本人も同様の体験をしたようである。残念ながらギャンブルをなくすことはできないようである。

自己診断チェックリスト

✓5個以上 → 病的ギャンブラーの可能性が極めて高い
✓3個以上 → ギャンブルの楽しみ方を見直すこと

- □ ギャンブルのことを考えて仕事が手につかなくなることがある
- □ 自由なお金があると、まず第一にギャンブルのことが頭に浮かぶ
- □ ギャンブルに行けないことでイライラしたり、怒りっぽくなることがある
- □ 一文無しになるまでギャンブルをし続けることがある
- □ ギャンブルを減らそう、やめようと努力してみたが結局ダメだった
- □ 家族に嘘を言って、ギャンブルをやることがしばしばある
- □ ギャンブル場に、知り合いや友人はいない方がよい
- □ 20万円以上の借金を５回以上したことがある。あるいは総額50万円以上の借金をしたことがあるのにギャンブルを続けている
- □ 支払い予定の金を流用したり、財産を勝手に換金してギャンブルに当て込んだことがある
- □ 家族に泣かれたり、固く約束させられたりしたことが二度以上ある

出典：ギャンブル依存症　田辺等著

～麻酔科からのお願い～

手術が決まったら…

麻酔科医　桐山 昌子

当院で手術を受けることが決まった方に、手術までの過ごし方についてのご提案があります。殆どお酒を飲まない方、自分も家族も煙草を吸わない方は、この話は軽く読み流していただいて構いません。

でも、**愛煙家の方、お酒がないと生きていけない！という方**

少しのお時間を下さい。手術前のお酒と煙草がいかに手術の結果に影響するのかという耳の痛いお話をします。

お酒と手術の関係

お酒が強い人は麻酔が効きにくい？このような都市伝説がありますが、実際麻酔薬の種類によっては、眠りにつくまでより多くの麻酔薬が必要だったりします。

当院で使われている麻酔薬は大酒飲みの方にもちゃんと効きますのでご安心ください。

では、アルコール多飲はどんな害があるのでしょうか？

アルコール多飲者は、心血管系、創部感染、出血などの合併症が多いことが報告されております。また、術後のせん妄（精神的に不安定になる、認知機能が落ちるなど）を起こしやすく、点滴やその他の大切な管を抜いてしまったり、安静状態が保てないので危険です。

手術前は、節度ある量（アルコールで20g程度）に抑えて、できれば禁酒にもっていくのが良いのですが、私自身『三度の飯より酒が好き』なので、皆様に大きなことは言えません。

煙草と手術の関係

愛煙家の方には申し訳ないのですが、煙草は百害あって一利なしです。

少なくとも４週間前からの禁煙が望ましいのですが、手術まで日にちがない方も大勢いらっしゃいます。禁煙はいつから始めても合併症を減らす効果があるので、**手術が決まったらまず禁煙**にトライしてみてください。

喫煙者は、手術に際して、①痰が増加、肺炎、②傷の治りが遅れる、傷が感染する、③骨がつきにくい、④脳卒中や心筋梗塞の合併症が多い、⑤傷の痛みが強い等々大変な思いをされる危険があるのです。

新型たばこでもこれらの合併症のリスクは減らないといわれております。

それともう一つ大切なことは、受動喫煙も同じ悪影響があるのです。ご家族が手術を受けられるときはご配慮をおねがいします。

整形外科医を始めとして当院の職員は患者さんにベストな医療を提供できるよう努力を重ねております。だから、患者様もベストなコンディションで手術を迎えていただきたいのです。

なんだかお説教じみた話になってしまいましたが、麻酔に関して少しでも不安や疑問がありましたら、何なりとお尋ねください。